

令和 7 年 7 月 11 日
自己点検・評価委員会

はじめに

聖徳大学短期大学部は、人材養成に関する目的及び教育研究上の目的並びに社会的使命を実現するため、教育の内部質保証への取り組みに努めております。平成 30（2018）年度より教育研究活動等の状況について、三つの方針（卒業認定・学位授与の方針、教育課程編成・実施の方針、入学者受け入れの方針）に基づく評価基準を自ら設定し、継続的に点検及び評価を行い、「教育の質」及び「学生の学びの質」の向上に努めて 7 年目を迎えました。その結果、本学の教育研究の水準は毎年着実に向上してきており、教育改革の推進とその特色ある先進的な取り組み内容の成果は社会からも一定の評価を得ております。

ここに令和 6（2024）年度の教育の内部質保証の取り組み結果について、以下のとおり公表いたします。

1. 教育・研究の質向上に向けた取り組み

令和 6（2024）年度第 1 回自己点検・評価委員会において、教育の内部質保証について前年度に引き続き「学習成果達成状況の言語化」、「学習成果達成の情報公表」などの達成目標を設定し、各学科においてその目標達成に向けて取り組みました。その結果、保育科、総合文化学科ともに学習成果の獲得状況を、数値による客観的指標と学生自身の振り返りの言葉で公表する「学習成果達成の情報公表」に到達しました。学生は自らの学習成果を言語化して振り返ることで、学習成果の獲得実感と成長実感、自己肯定感を高めています。また、情報公表を通じ、学校という公共性の高い組織として社会への説明責任を積極的に果たせていると考えます。本学の教育の内部質保証の取り組みは年々向上しており、学生自身の成長実感に寄与する「学習成果の可視化・体系化」が確立しつつあります。今後も各学科において各取り組みの成果の検証と、必要な改善を重ね、より完成されたシステムへ進化させるとともに、好事例の展開等を通して全学的な底上げを図り、短期大学全体の質向上に取り組めます。

学生の成長を促す本学独自の学びのプログラムとして、併設する聖徳大学と共に「Field Linkage®」（以下 FL）を全学科で展開しました。FL は異なる専門分野の学生同士が「将来活躍する現場」での立場を想定しながら学び、多様な視点を取り入れて問題解決能力を養います。学生はこのプログラムを通して多職種協働による学びを深化させたり、他領域の視点から新たな価値観を学んだりしています。社会ではチームで業務やプロジェクトを推進する力が求められますので、引き続き FL を全学で推進してまいります。

研究面についてはゼミナールと卒業研究の充実に取り組めました。保育科では、「子育て支援」等の研究活動を学生主体で進め、12 月に活動成果発表の場として学生フォーラムを開催しました。この活動は後述する「4. 社会貢献・地域連携の取り組み」とも関連しています。総合文化学科は、学生全員が卒業研究・制作に取り組み、9 月に中間発表会、12 月に卒業研究成果発表会を開催し、研究要旨及び作品の写真を雑誌『九十九段』にまとめました。保育科の学生フォーラム、総合文化学科の卒業研究成果発表会は 1 年生から参加でき、先輩の研究を自身の研究に活かせるよう環境を整えています。また、両学科ともにゼミナールや卒業研究についてのルーブリックを導入しており、評価の観点が明確

化することで、学生自身が評価の観点を理解しながら研究を進めることができるようになっていきます。今後も短期大学での学びの集大成であるゼミナールと卒業研究の充実に取り組んでまいります。

2. 学生のキャリア形成支援への取り組み

学びの成果の一つである進路支援については、令和6（2024）年度も、前年度に引き続きクラス担任やゼミ担当教員を中心に学科とキャリア支援課による教職協働の連携強化に努めました。1年次よりキャリア教育を通じて早期に学生自身のキャリア意識の向上を図り、学科とキャリア支援課が連携してシームレスな支援を行うことで、令和6（2024）年度卒業生の実就職率は95.9%となり、引き続き高水準を維持しています。

就職先については、上場企業や女性活躍企業（「くるみん」「えるぼし」認定企業）などから内定を得る学生が年々増加しており、就職実績に大きな成果を上げてきています。このように本学のキャリア支援は適切に実施されており、今後も各学科とキャリア支援課の連携を強め、学生が希望する進路を実現できるよう支援してまいります。

3. 学生募集（定員充足率向上）への取り組み

継続的な少子化の進行により18歳人口が年々減少するなど高等教育を取り巻く環境は厳しさを増しています。その中でも短期大学を取り巻く環境は非常に厳しく、女性の4年制大学志向の高まりなどもあり、令和6（2024）年度も今後の学生募集停止を決断する短期大学が相次ぎました。この厳しい状況を踏まえ学生募集の強化に取り組みました。

具体的な施策として、受験生の進路決定に大きく影響するオープンキャンパスにおいて「Let's Buddy」を新コンセプトとして策定し、本学の強みである伴走力と入学後の期待を醸成するプログラム構成へと刷新しました。また、各学科においては、学生が企画段階から参画し、当日の受験生対応にもあたりました。この取り組みは学生自身がどうすれば本学の魅力を受験生や保護者に伝えられるかを考え試行錯誤することで、学生自身の成長に繋がるのはもちろんのこと、受験生目線では入学後の自分をイメージするロールモデルにもなっています。さらに「Change, Challenge, Create.」をスローガンに掲げ、学生・保護者向けには「強く、楽しく、わたしらしく。」をメッセージとして打ち出しホームページのリニューアルを行うなどブランドの刷新に取り組みました。こうした学生主体のオープンキャンパスの実施や新しいイメージ発信により、オープンキャンパスの来場者アンケート結果における満足度が向上するなどの結果も表れ始めています。

退学者の抑制については、学科内での連携を強化するなど、早期に問題を把握し、解決に取り組む体制が構築されつつあり、基礎学力や人間関係に起因する退学の予防に一定の成果を上げています。その一方で退学の理由は多様化しており、年々対応が難しくなっています。引き続き退学に至る要因の分析と、対策に取り組む必要があります。

4. 社会貢献・地域連携の取り組み

令和6（2024）年度も、各学科において、学科の特色や専門性を活かした社会貢献・地域貢献活動に取り組みました。保育科は平成27（2015）年度より「子どものふるさと愛を育む教材開発」を研究テーマとして活動している「まつどソング研究グループ」が、その継続的な活動を評価され、松戸市主催の「祝 松戸市人口50万人到達メモリアル感謝祭」に招かれ、ステージ発表を行いました。また、「子どものアート研究グループ」は7月開催の「アートパーク 17～伝説のとんでもワンダーランド～」に参加し、「めざせ！ KING スナイパー」というダンボールを用いた遊びや、空き箱等の使わなくなった生活資

材で好きなものをつくる「つくりたいものをつくろう」で、地域の子どもたちと交流しました。総合文化学科は株式会社アトレが運営する「アトレ松戸」及び東和フードサービス株式会社が運営する「Cheese Egg Garden」と連携し、松戸限定コラボメニューの開発、販売を行いました。さらに平成 27 (2015) 年度より連携している地元の岩瀬自治会の「岩瀬まつり」に学生がスタッフとして参加したり、UR 都市機構とコラボし、市内の UR 常盤平団地において、地域交流イベントである「古本まつり」を開催したりしました。学生は、こうした社会や地域との連携を通じて、地域課題の解決に取り組み、実践的な力を身に付けています。今後も短期大学のもつ知的資源を活かした社会貢献・地域連携活動を推進し、地域とともに発展していくことを目指します。

まとめと今後の方向性

以上のとおり、本学の教育研究活動の点検・評価は有効に機能しており、改善が毎年進み、その成果は確実に現れてきています。全学的に取り組んできた学習成果の可視化・体系化については、学生による学習成果獲得状況の言語化や、学習成果達成状況の公開が進み、仕組みとして概ね構築されたと言えます。今後はこの仕組みを踏まえ、各学科としての教育成果についての点検・評価を進めることと、引き続き PDCA サイクルを回し、全学的な質保証体制の更なる高度化に取り組んでまいります。

以上